

## 『十人町。朝永のアパート①』

朝永（ともなが）

浅野（あさの）

ウラカミ（電話の声）

19時頃。

朝永、ソファで眠っている。

浅野、缶ビールを飲んでいる。

テーブルの端に出張土産の「博多通りもん」が置いてある。

と、朝永の携帯が鳴る。

朝永、起きない。

浅野「みちる。」

朝永「んー。」

浅野「電話、鳴っとる。」

朝永「んー。あ、しんちゃん。来とったんね。」

浅野「電話。」

朝永「あ！」

朝永、応答。

朝永「はいつ、もしもし。」

ウラカミ（あ、トモナガさまでいらっしゃいますか）

朝永「あ、ですー。朝永ですー。」

ウラカミ（トモナガリョウタさまの賃貸契約の件でお電話さしあげました。）

朝永「はいはい、本人から聞いてます。」

ウラカミ（ありがとうございます。今お時間大丈夫でしょうか。1、2分程度で済みますが。）

朝永「はい、大丈夫ですー。」

ウラカミ（ありがとうございます。あ、すみません、わたくし、家賃保証・株式会社ユウ  
ユウのウラカミと申します。）

朝永「あ、どうもー。お世話になりますー。」

ウラカミ（トモナガリョウタさまの保証人になられたということでお間違いございません  
でしょうか）

朝永「はい。」

ウラカミ（ありがとうございます。では、確認のため、フルネームと生年月日を教えてい  
ただけますでしょうか？）

朝永「はい。<sup>ともなが</sup>朝永みちる、昭和59年、あ、西暦の方がいいですか？」

ウラカミ（あ、いえ。）

朝永「あ、大丈夫ですか。昭和59年8月9日です。」

ウラカミ（はい、ありがとうございます。ではトモナガさま、家賃は3万5千円というこ  
とで、ご了解いただけてますでしょうか？）

朝永「はい、聞いてます。」

ウラカミ（ありがとうございます。では、これで確認完了となります。）

朝永「はいー。」

ウラカミ（お時間いただき、ありがとうございました。失礼いたします。）

朝永「はい、どうもー。」

朝永、電話を切る。

浅野「みちるさ、」

朝永「ん？」

浅野「鍵かけろよ、ちゃんと。」

朝永「あ。開いとった？」

浅野「いや、だから俺、普通に入れたし。」

朝永「あ、そっか。よかよ。しんちゃんだし。」

浅野「いや、俺だからよかけど、そうじゃなかったら危なかやろ。」

朝永「あー、うん。」

浅野「ほんとに一。」

朝永「うっかりしとったんよ。」

浅野「気いつけんと。」

朝永「うん。（鍵）かけた？」

浅野「かけた。」

朝永「すまんね。」

浅野「よかけどさー。どっから？」

朝永「ん？」

浅野「今の。電話。」

朝永「ああ。家賃保証の会社。」

浅野「家賃保証？」

朝永「株式会社ユウユウ、て。パンダみたいな名前。」

浅野「なんなの。」

朝永「弟が家借りるんだって。今日7時に電話くるようになったの。」

浅野「え、今住んどるところ引っ越すってこと？平和公園んそばやったっけ。」

朝永「うん。なんか転職するみたい。諫早に住むんだって。」

浅野「諫早？」

朝永「うん。来月から。諫早のゴルフ場で。」

浅野「どんな仕事やる。」

朝永「芝の管理みたいなやつて言うとした。」

浅野「へー。」

朝永「今も施設管理ん会社やし。そいこそ公園ん手入れとか。あちこち。」

浅野「ああ。」

朝永「休みもとれんで大変て言いよった。諫早んゴルフ場ん方が条件よかみたい。」

浅野「そっか。」

朝永「保証人になってくれって電話あって。」

浅野「借家の？」

朝永「うん。ま、なんもなかやろうし。」

浅野「まあ、なかやろうけど。」

朝永「あ、『通りもん』。」

浅野「ああ、お土産。」

朝永「博多？」

浅野「出張。博多駅ん広場で法被着て干物ば売ってきたとよ。長崎市物産フェア。」

朝永「ふうん。昨日までうちん会社ん事務所は『博多通りもん』祭りだったよ。」

浅野「何それ。」

朝永「福岡から来る営業ん人たちの手土産がね、ほとんど『博多通りもん』なの。工場ん機械のメーカーさんとか。」

浅野「へー。」

朝永「いつの間にか給湯室に4箱たまっとって」

浅野「え、『博多通りもん』が？」

朝永「うん。で、『通りもん祭りやねー』で笑いながら、みんなして休憩のおやつで食べとった。毎日。」

浅野「・・・違うのにすればよかったか。」

朝永「よかよか。美味しかもん。」

浅野「うん。」

朝永「あ、髪。」

浅野「うわ、今さら。」

朝永「ああ・・・」

浅野「ん？」

朝永「パーマかけた・・・？」

浅野「ああ、うん。ちょっと、かけてみた。」

朝永「・・・ふうん。」

浅野「え、何。」

朝永、黙って「博多通りもん」を開封しはじめる。

浅野「え、何、変ね？」

朝永「いや、変じゃなかけど。」

浅野「何よ。似合わん？」

朝永「いや。」

浅野「何ね。」

朝永「しんちゃんさー。」

浅野「うん。」

朝永「もしかして、何か目指しとる？」

浅野「へ？」

朝永「何か、サッカー選手とか。」

浅野「は？何よ、サッカー選手で。」

朝永「そんな感じじゃん。」

浅野「え、何がよ？」

朝永「鏡見て思わんかった？」

浅野「何を。サッカーをや？」

朝永「もうよかよ。」

浅野「何も目指しとらんぞ。気分ば変えようと思うただけで。」

朝永「もうよかて。」

浅野「そげんおかしかとか？」

朝永「何でね。」

浅野「そげな態度たい。」

朝永「自覚あつとでしよ。」

浅野「は？」

朝永「もう、よかよか。」

浅野「何ね、自覚て。俺は、気分ば変えたらいかんとか？」

朝永「だからそげなこと言うたらん。」

浅野「何ね。久しぶりに来たとに。」

朝永「そげん怒ることでもなかでしようが。」

浅野「・・・。」

朝永「今日、泊まっとでしよ。」

浅野「・・・うん。」

朝永「着替えたら？」

浅野「うん・・・。」

朝永「ご飯は？」

浅野「うん、食べたらん。」

朝永「何にしよーかねー。」

と言いながら朝永、博多通りもんを食べる。

浅野、髪を気にしている。